

【シンポジウム】

地球社会共生学部 開設記念シンポジウム

『地球共生を仕事とする』 Working for the Whole World

地球社会共生学部は地球社会共生学会との共催で 2015 年 11 月 18 日に「地球共生学」講義の一環として学部開設記念シンポジウム『地球共生を仕事とする』を開催した。パネリストには元国連事務次長の赤阪清隆氏、多国籍企業ジョンソン・エンド・ジョンソンでの社会貢献の経験を生かしベンチャーを起業した高瀬昇太氏、グローバル金融企業ゴールドマン・サックスから国際人権 NGO へと転身した吉岡利代氏を迎え、地球的課題への取り組みをそれぞれの経験から語っていただいた。「地球社会共生」をうたう学部の初年に相応しいシンポジウムとなった。第一期生たちが未来のキャリアを探るヒントを得ようと耳を傾けた学部開設記念シンポの内容を将来の地球社会共生学部生と共有するため、その全記録を学会紀要『地球社会共生論集』創刊号に収める。

日時：2015 年 11 月 18 日 午前 9 時～10 時半

場所：E 棟 201 号室

主催：地球社会共生学部 地球社会共生学会

パネリスト

赤坂 清隆 元国連事務次長

高瀬 昇太 株式会社 Wincam 社長

吉岡 利代 国際人権 NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチ・シニア・プログラマー
ラムオフィサー

モデレーター

会田 弘継 地球社会共生学部 教授

司会) ただいまより地球社会共生学部及び地球社会共生学会主催、地球社会共生学部開設記念シンポジウムを開催いたします。

テーマは「地球共生を仕事とする」です。モデレーターは地球社会共生学部会田弘継教授、司会進行は私、菊池が務めます。よろしくお願いいたします。

それでは、シンポジウム開催に先立ちまして、仙波憲一青山学院大学学長よりご挨拶があります。よろしくお願いいたします。

仙波) おはようございます。

今日は地球社会共生学部の開設記念シンポジウムを、「地球共生を仕事とする」というテーマで開催いたします。本日は、これまで地球を仕事場としてきた、あるいは現在仕事場として、文字通り「地球共生を仕事とする」ことを実践され、各方面でご活躍なさっている方々からご講演をいただきます。それぞれのお立場からの現場経験に基づいた実感が込められた貴重な話を聞くことができと思います。将来地球規模の視野に立って仕事をすることを目指している皆さん方にとって、大変貴重な講演となりますので一言一句洩らさず聞き、今後の学びへの指針としてください。

なおご講演の後、講演者でのパネルディスカッションも予定されていますので、こちらについてもご期待下さい。

これで私の開会のご挨拶といたします。ありがとうございました。

(拍手)

司会) ありがとうございました。

それでは、会田先生、今回のシンポジウムの趣旨について簡単にご説明いただけますか。

会田) 今回のシンポジウムは、「地球共生を仕事とする」というタイトルをつけました。皆さんこの学校を卒業して、いろんな国際的な舞台で活躍しようと思っていられると思います。その目的は、世界の調和のある共存、それを目指して仕事をしていかれるんだろう、そうしてほしいなと思っているわけです。ということで、今回は、まさに今私が申し上げたような仕事をしてきた3人の方、それぞれ国際機関におられたり、あるいは民間企業から NGO

に移って仕事をされたり、あるいは民間企業から民間の力を使って地球共生のために今、働いておられる方々にお話をしてもらうことになります。

まず一人ずつプレゼンテーションを15分ずつしていただいて、その後壇上でパネリストに私を交えてディスカッションをし、その後皆さんからいろんな質問を受けて答えていただきます。パネラーの方からも皆さんに質問が投げかけられるかもしれないので、そのつもりでしっかりと聞いてください。

それでは、最初に赤阪さん、現在はフォーリン・プレスセンターの理事長をされています。司会の菊池さんからご紹介があります。

司会) それでは、1人目のパネリストをご紹介します。

赤阪清隆様です。2007年から5年間、国連事務次長、広報担当を務められました。それ以前には、GATT（関税貿易一般協定）事務局勤務を経て——GATTはのちWTO（世界貿易機関）になります——、その後WHO（世界保健機関）事務局長補佐、OECD（経済協力開発機構）事務次長、国連大使などを務めておられます。現在はフォーリン・プレスセンター理事長でいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。（拍手）

▽持続可能な地球めざして

赤阪) 皆さん、おはようございます。

私からは、今の地球環境とか、大きな話から始めさせていただきたいと思っています。

現在の地球環境ですが、人口が73億人、日本の人口が1億2,800万人ですよね。世界の国民総生産が78兆ドルで、そのうちアメリカが17.5(兆ドル)といえますから、23%ぐらいですね。中国が10.4(同)、日本は中国の半分以下になっていますね。先進国のOECDの加盟国が34カ国で、一応ほかの国は途上国となっております。

貧困人口、1人わずかに一日1ドル25セント以下で過ごしている人が、世界で8億4,000万人。世界の人口の11%ぐらいです。うち4億人はアフリ

カに住んでいるということになります。

5歳以下で死亡しているのが600万人、これは死ななくてもいい病気とかマラリアなどで亡くなっています。

きれいな水がない人が6億から7億人で、トイレ不足が24億人。インドでトイレがない人が4億人。ですから、今、モディ首相がインドでトイレを普及させようということで非常に頑張っています。森林面積は毎年減少していますし、大洋では過度の魚類の捕獲、大気汚染が広がっています。

私どもが若いときには、北京、カイロ、モスクワ、アフリカなどに行くのが楽しくて、いろんなところを見たのですが、今はどこを見ても大気汚染。いま言った都市なども大気汚染でひどい状況になっています。地球温暖化は、既に0.74度くらい上昇していますが、これからますますそれが加速するだろうと予測されております。

世界の人口ですが、73億人と言いましたが、これからまだまだ増えるんですね。最近までは90億人ぐらいで横ばいになるだろうと思われていたのが、国連の予測では2100年には112億人。このうち、アジアでは中国の人口は横ばいになります。最近やっと一人っ子政策をやめて2人でもいいということになりましたが、それでも多分人口は余り増えない。ぐんと増えるのがインドですね。インドはもうすぐ世界一の人口大国になります。

アフリカの人口は、今10億人くらいですが、これから2100年には4倍以上になる。そのうち特にナイジェリアやコンゴ、タンザニア、エチオピアなどの人口増加率が高い。ナイジェリアのラゴスに行ったら、もう既にいっぱいなんですよ。ごみが処理できない。人がいっぱいという状況なんです。これからますます人口が増えていくという。どうなるんでしょうか。

地球温暖化ですが、二酸化炭素の濃度が2013年5月の段階で400ppm。産業革命以前は280ぐらいですから、ぐっとこの濃度が高まっています。450ppmに達した段階で地球の温度が2度上昇するとおそれられているものですから、今2度の上昇を上限にしようということで、国際的な努力が行われているんですが、このままでは、2100年の段階では3度から6度まで上

がるのではないかと予測されています。2100年、我々は全部いないでしょうから余り2100年のことを心配してしてもしかたないかもしれませんが、2050年の段階でも異常気象になる可能性があります。ますます暑い地球になることが予想されております。

この写真は、今年メキシコを襲ったハリケーンの宇宙からの写真ですが、北極ではホッキョクグマが少なくなった氷の上で苦しんでいる。洪水あるいは森林の火事、それに干ばつなど、世界中ありとあらゆるところで気候変動の影響が出ています。こういう結果を見つつ、人類は自然破壊とともに滅亡の道を歩むかもしれないぞというのが、ジャレド・ダイアモンドというアメリカ人の書いた『文明崩壊』という本です。これは非常におもしろい。これまで文明が崩壊してきた国や地域の歴史を分析しているんですが、特にイースター島での森林破壊、土壌劣化による文明の破壊などを紹介しています。過去のケースは現在のグローバル化した世界にも当てはまる。人口増とか環境破壊とか、大量消費、大量破壊なども行きつくところは地球全体の崩壊につながると言っています。

私は国際機関の勤務が長かったのですが、国連でも、こういう問題を扱ってはいるんですが、なかなか解決につながらない。まだ、どこの国も深刻度が足りないんですね。深刻な環境問題が数多く取り上げられております。けれども、自然資源の破壊、限りある資源の枯渇、人間がつくり出している危険、さらには人口増にかかわる問題などがますます深刻化しているのが現状です。

ですから、こういう社会を変えようということで、1987年にブルントラントという元ノルウェーの首相がリーダーになった国連の委員会が、持続可能な開発という概念を発表して、それが今やかなり大きな流れになりつつあります。

持続可能な開発というのは、将来の世代のニーズを満たす能力を損なわずに、現在の世界の、我々のニーズを満たせるような開発のことを言います。我々の成長を求める、あるいは開発をするにしても、その開発した結果が、

我々の子どもや孫が生活を楽しもうとしたときに、環境が悪くなっている、あるいは資源がないというような状況にならないようにしようという概念です。

それから 20 年余り、1992 年のリオ会議（注・環境と開発に関する国連会議）等を経て、ようやく今年持続可能な開発目標ということで 17 の目標が決まりました。これが大体今の地球が抱えている、ありとあらゆる問題をカバーしているといっても言い過ぎではないと思います。

貧困の撲滅、飢餓の撲滅、教育の確保、女性と男性の平等、水と衛生、あるいはエネルギー、経済成長、インフラ、平和で包摂的な社会の促進などを含んでいます。包摂的なというのは、人を排他的に疎外させないような社会をつくろう。フランスでつい先日起きたテロ、そのテロに参加しているフランス人などは、この包摂的な社会ではなくて、フランスの郊外で貧しい生活を送って、フランス社会から取り残された、疎外されていた人たちが、イスラム国の動きに同調してテロリストに走っていると言われていています。そういう社会をなくして、平和な社会を作ろうということも、この持続可能な開発目標に入っています。

持続可能な開発というのが、だんだん底流になりつつあると申し上げましたが、最近まで我々の物の考え方というのは、ヨーロッパ中心主義の考え方に大いに影響を受けていました。日本の明治維新降、我々日本は欧米に追いつき追い越せという考え方でやってきました。その背景にあるのが進歩主義、明日は今日よりも良くなるという進歩主義ですね。それから近代化理論、ロストウ（注・米経済学者ウォルト・ロストウ）のテイク・オフ観というのを経済をやった人は聞かれたかもしれませんが、テイク・オフして近代化する、みんな同じ道を歩むという考えでやってきたわけです。

ただ、その同じ進歩主義の中でもマルクスの唯物史観というのは、封建社会から資本主義社会、社会主義社会、共産社会という、これも一本の道を歩むということだったわけですが、リベラリズム、自由主義と唯物史観の対立ということで、冷戦構造が長年続きました。

そういう中で、アジア諸国では進歩主義に異を唱える意見もありましたし、マレーシアのマハティール首相、シンガポールのリー・クワン・ユー首相等がアジアの価値論を打ち出したこともあったんですが、冷戦が崩壊するにしたがって、会田先生のお友達のフランシス・フクヤマさんが『歴史の終わり』でもって、リベラル民主主義でこの歴史は終わるんだという、一本道で到着点が見えたということを言ったわけです。それが20数年前ですね。

それからイスラム諸国の台頭、アメリカのネオコン、中国の台頭、最近では中国、ロシア、イラン等の民族主義ですとか、地政学の動きというものがあるって、世の中がだんだんわからなくなってきました。冷戦時代ははっきりしていたのが、今の世の中は、これからどうなるんだというのがよくわからない。そういう中で、我々は持続可能な成長を求めるべきだという国際的な動きが出てきたわけです。

▽日本の共生イニシャティブ

こういう中で私が強調したいのは、既にでき上がっている既存の国際秩序というものがあることです。民主主義とか国連憲章とか、特に世界人権宣言です。世界人権宣言は13条しかありません。ぜひとも読んでいただきたいんですが、持続可能な開発の項目はすべて1948年にできた世界人権宣言の中に含まれています。その中で、日本が果たし得る役割というのは、こういう普遍的な価値とか、国際秩序の保持、あるいは普遍性のあるアジアの価値というものを普及することではないかと思います。

アジアの価値というのは、家族を大事にするとか、隣人に配慮するとか、パブリックグッツと言われる法とか秩序を尊重する政府の役割を認めることなどです。あるいは文化多元主義、穏健な外交、それから金銭でははかれない幸福の追求などもアジアの特徴でしょう。ブータンの幸福指標というものもありますけれども、ブータンの場合はまだ貧しいですから、あれをモデルにするわけにもいきません。

これから皆さんは、あくなき欲望に基づいて、仕事仕事でお金をもうけて、資産を増やして、相続税を少なくして、消費して浪費して自然破壊の道を歩むのか。それともよい暮らしを求めて、健康とか、生活の安定とか、人々からの尊敬、人格または自己の確立、自然との調和、友達との友情、あるいはレジャー、余暇といったものを求めるのか。ロバート・スキデルスキーというイギリスの学者が言っている、この7つのよい暮らしの要素というのは我々の考える良い暮らしと共通なものがあると思います。

日本では、地球共生のための日本のイニシアティブ、既に3R、リデュース、リユース、リサイクルといったイニシアティブとか、もったいない運動、あるいは北九州イニシアティブ、今年できた仙台防災イニシアティブなんかもあります。課題先進国として、日本は世界に環境分野、保健分野、教育分野、防災で活躍することができます。いろんな分野があるわけですから、皆さんに私が申し上げたいのは、国際的に活躍するためには若い皆さんのときに何か使命感を見みつけていただきたいということです。

グローバルに活躍するためにはコミュニケーション能力が大事だといわれますが、英語ができてでもそれで何をするかということが分かっていなければ何の役にも立たない。だから、何を人生の使命感にするかを考えていただきたいのです。皆さんは、死ぬまでにこれから30年、40年、50年と長い期間があります。皆さんは活躍が期待されているわけですから、その30年、40年、50年の間に何を使命にして生きるかをじっくりと考えてほしいと思います。まだまだ日本に、また世界中にもたくさん問題があるわけですから、ぜひとも自分はこの分野で国際的に活躍してみたいという使命感を見つけていただきたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

司会) ありがとうございました。

これは授業の一環です。この授業が終わった後に課題を提出していただきます。課題は、この授業を通して皆さんは地球で働くということはどういうことか、何が重要なのかについて提出をしていただきます。提出の紙と提出

場所に関しては、皆さんお手元のチラシに書いてありますので、それを参考にしてください。

地球社会共生のために働く大事な点は何だと思いますか。今回のシンポジウムを通して考えたことを述べてください。

それでは、2人目のパネリストをご紹介します。

高瀬昇太さんです。外資系企業ジョンソン・エンド・ジョンソンで、グローバルプロジェクト、社会貢献委員会リーダーを務め、NPO、NGOを支援、社会人とNPO、NGOをつなぐプロジェクトを主宰しながら、ベンチャー企業を立ち上げて運営していっています。株式会社 Wincam 社長、高瀬昇太様です。(拍手)

▽社会に信頼される企業を

高瀬) 皆さんおはようございます。

今日自分からは、企業にしながら社会のために働くという点でお話をさせてもらえればと思います。

自分は高瀬といいます。今は Wincam、実は社名変更して、この後プリンカムになるんですけども、いわゆるスタートアップを立ち上げて、その傍らスタートアップ関係の支援や、あとは、プロボノということでNPOの支援なんかをしています。いろんなプロジェクトに参加させてもらっているんですが、もともとSEを10年ぐらやっていまして、その後ジョンソン・エンド・ジョンソンで働きました。その傍らといいますか、スタートアップ・ウィークエンドという起業家支援プログラムみたいなものに入って、それに感化されてというか、自分自身でもせっかくの一度きりの人生なので、やりたいことをやろうということで、自分でスタートアップを立ち上げたということです。

ジョンソン・エンド・ジョンソンにいる間には、CSR(注・企業の社会的責任)部門というのがありまして、自分はIT部門で働きながらCSR部門もやると

いう形で、NPOと一緒に仕事をさせていただくという機会をいただきました。三者三様のそれぞれのコミュニティにいろいろ顔を出させてもらっているということで、私自身いろいろ気づく点があって、その辺をお話しさせてもらえればと思っています。

これは弊社の商品なのですが、瞬きで写真が撮れるカメラというもので、何をつくっているんだという感じですが、今日はその話とは違って、CSR。

ジョンソン・エンド・ジョンソンで働いているときにCSR部門があって、そこはみんなそれぞれ自分の仕事をしながら、何か社会のために働きたいという思いで、すごく忙しいんですが、時間を見つけてみんなで集まって頑張っているという部分がありました。CSRというのは、簡単に言うと企業が果たすべき社会的責任ですね。企業というと普通は利潤追求する組織なので、金もうけをすればいいよと。それまではそういう風潮があったと思いますが、それぞれ従業員がいて株主がいて、そして社会に対して説明責任があって、その説明責任を果たさないと会社自体が成り立たないと言われて、昨今CSRという言葉がどんどん出てきています。

背景としてはエンロン事件とか、皆さん知らないでしょうが、映画にもなったんですけども、世界を代表するようなエネルギーの会社が、会計会社や監査会社と結託して不正決算とか報告をしていたんです。それが明るみに出て、当時カリフォルニアの年金基金とか、そういう巨大なところがお金を入れていたのに、倒産してどうするんだということで、国中を巻き込んだ大事件になりました。

あとは環境問題などが取りざたされるようになって、いくら利潤を追求しても社会に対してしっかり説明責任を果たすとか、予測可能なモデルをつくっていかないと、そもそも会社自体も成り立たないということで、一言で言うと社会で信頼されるような企業をつくることであって、今や企業の中核的戦略の一端を担っていると言えます。

CSRというと、そういう意味ではすごく幅広いですが、よくCSRは社会貢献とかボランティアとして捉えられることが多いと思います。それ自体特

におかしなことではありませんが、ジョンソン・エンド・ジョンソンの社会貢献というので紹介させてもらおうと、健康というのをテーマに、子ども・女性・心・高齢者という4つのカテゴリで、13のNPO団体をピックアップしてプログラムをやっていきます。簡単に言うと助成プログラムです。事業計画、助成プログラムをオープンして、NPOに事業計画なりを出していただいて、先ほどの4つのカテゴリに見合うかとか、ジョンソン・エンド・ジョンソンが果たすべきところと合致するかというような観点で評価をして、実際に寄附を実行していく。その後、それが効果的に使われているかというところを一緒に見ていく。そのPDCA（注・Plan-Do-Check-Act）を回して行って、それが何年か経っていく中で、その団体の活動が本当に成長していくかということを見させてもらっています。

NPOについては皆さんよくご存じだと思いますが、ノンプロフィットということで、当面利益を追求しないことでは民間企業とも違うし、一方で政府がやるような大規模な事業だったり、例えば政府だと公平性というところも重要視されますが、そういう点で、なかなか手がつけられないようなところをNPOやNGOが助けている。あとは、自分で事業をつくって収益を上げるという、なかなか難しい公益事業をやっているの、どうしても寄附や助成に頼らざるを得ないというような内情があります。

実際に私が支援していた、シングルマザーの支援をしているNPOの事例を紹介しますと、シングルマザーの世帯というのが日本に123万ほどある。その中の80%以上が離婚が理由でシングルマザーになっています。そして、年間の就労収入は平均181万円、ここに支援なんかを受けて生活しているんですけども、絶対にこれは苦しいですね、生活が。それを、もっと条件のいい就労を支援しようとされていたNPOです。

たくさん課題はあります。何か技能の資格がないとか、あるいは結婚して早く子どもが生まれて辞めちゃったので、企業で働いた経験がほとんどない。あるいは子どもがいるので時間的なハンデがある。そういう人は企業が雇わなかったりするんですよね。あるいは相談できる人がいないとか、非常

に疲れているということで、そこに対して資格をとれるような講座をやろう、メールの書き方講座をやろう、あるいは交流会をやろうよというようなことをやっていました。いろいろ見ていくと、組織運営で課題というのが出てくるんです。例えば、ほかにも似たような NPO がありますよと、その辺は協力し合っていきましょうと間を取り持つとか。

実は現状、母子家庭の本当のニーズというのは、聞いていくと余り分かっていないところがある。ちゃんとそれを分かって活動をしなければいけないので、アンケートを実施していきましょうと。あとは就労先の企業が求めていることも調査しましょうと。こんなことを話し合っていてやっています。

▽ビジネス・スキルで貢献

実際にそういう形でいろいろな NPO さんと関わっていくと見えてくる課題、例えば人手不足、目の前のやることに手いっぱい人手が足りない。あるいは組織がしっかりできていない。こんなことをやればいいんじゃないかと思っているんだけど、新しい人を雇ってやるほどの資金もない。せっかくいいことをして頑張っているのに、何だということで苦しくて、こういうスパイラルに入っている NPO さんが非常に多かったなと思いました。簡単に言うと、リソースない、お金がない、でも意志は強くてやってやるということで、これに対して助成プログラムをやっていたんですが、私自身ができることはないかということで、2つの解決方法を思い立って実際にやってみました。

1つ目はプロボノです。簡単に言うと社会人のスキルで社会問題を解決するということで、リソースない、お金がないというところにプロボノで水を注ぎましょうというような意図があります。実際にこれは私もかかわった、ある東北の震災の後に家庭環境が悪くなって、子どもたちの居場所がないと、そこに居場所をつくってあげようというような NPO ですね。人に頼り過ぎているとか、会計のフローがうまく行っていないとか、収益モデルをつくる、

これはどこの NPO も共通するような課題ですが、発信力はなかなか持っていない。

そこに、社会人とかビジネスマンを連れてきて、プロジェクトをつくる。例えば会計処理がうまくないのであれば、会計担当の人を呼んできたり、発信力を上げたいということであればマーケターを呼んできたり、その上にプロジェクトマネージャーを置いて、NPO と話をさせて、要件を提示していく。成果物を決めて、プロジェクトを回していく。仕事みたいですね。仕事を外でやっているということですね。そういうスキルを持っている社会人に NPO を持ってきて、一緒に仕事をしましょうよということで、大企業だったり、ビジネスマンと NPO の間を持つような活動ができたなと思っています。

実際に NPO には喜んでいただいたそうですが、ビジネスマン、逆にこのプロジェクトに採用されたビジネスマンも、ふだんは当たり前のように仕事をしているスキルが、こんな形で実際に社会のために役立つんだとか、喜んでもらえるんだということを実感して、とてもやりがいを持ってやってもらったということがありました。

2 つ目の解決策としてやってみたのは、スタートアップ・ウィークエンド・チェンジメーカーというものです。実際にアーチとかインパクトアウト、そういうところに支援をいただいて実現したものです。スタートアップというものの力で社会問題を解決しようということで、スタートアップ・ウィークエンドというところは、非常に行動力もネットワーク力、あるいは収益、自分で起業するような人たちなので、そういう力を借りて NPO を支援するようなことができないかということで、どんどん行動して週末の 54 時間で起業しましょうみたいなプログラムなんですけれども、実は世界 700 都市、日本では 50 回ぐらいやっているというでかいネットワークなんです。

自分はその東京の運営とかをやっているんですけども、要はそのエネルギーをもっと社会のために還元したいということが思いつきの始まりですね。いわゆる社会起業家というか、収益をしっかりとつくるモデルをつくり

ながら、社会のためとか地球のためにいいモデルをつくってもらいたいという活動をしています。

こういう活動の中でいろいろ気づく点が、大きく2点ありました。

1つ目は、多様な生き方があるんだなということです。大企業で働くというのも一つの生き方だし、スタートアップできるんだっていいだろうし、あるいはNPOに入って直接的にもっと社会のために働くということもいいと思います。それぞれ違う特徴というか、いいところも足りないところもある。こういう合間というか、要は大企業で働きながらNPOを助けることだってできるし、あるいはスタートアップやりながらNPOと一緒に働いて、社会のために働くこともできる。本当にいろんな働き方ができるんだな、いろんな人がいるなということが1点。

2つ目はサステナビリティ、継続可能なモデルというところで、これはそれぞれ全然違う特徴を持ったコミュニティです。なかなかこんないろんなところに所属する人というのは実は少ないですね。大企業にいる人は大企業の人と付き合うし、ただそういうそれぞれの特徴を補い合うような、重なったところというか、要は大企業のスキルとかビジネスの力というのがNPOに役立つ。そういう重なったところを追求していくというのは非常に大事だと思います。

先ほどの先生のお話と同じなんですが、地球の人口2050年までに90億人になると言われている。それを支えるために2030年までに6億の新しい雇用が必要だと言われています。それから地球温暖化、さらに1日2.5ドル以下で生活している人がいまだに30億人いる。いまだに安全な水を求めて重労働をしなきゃいけない人が世界に8億人いるということです。

皆さん日本に住んでいるとある意味楽な、そういうところと比べたら楽な生活かもしれないですけども、実はこんな世界に住んでいるということで、そういう世界がこのまま続いて、人類が生きていくというのであれば、要は今までの考え方と全然違う考え方で動かなきゃいけないということを、このアインシュタインも言っています。その中で、さっき言ったような多様な生

き方が許容されながら、サステナブルなモデルを追求していくということは、個人的には今後重要になっていくんじゃないかと思っています。

皆さんすごく若いですし、いろんな可能性があるということで、それはたしかなんですけれども、一方で人生一度きりということなので、例えば10年、20年、30年かけてやれることというのは、そんなにいっぱいないと思います。ただその中で、さっき言ったように、いろんな多様な生き方をやってみていいよというような世の中に、だんだんできてきているなと思うところです。どんどんそういうものを経験して、その中から学んだことで、一度きりの人生というか、未来というものを決めてもらえばいいんじゃないかというふうに思っています。

以上です。ありがとうございます。(拍手)

司会) ありがとうございます。

大変貴重なお話を赤阪先生、高瀬先生から伺いました。

では3人目のパネリストをご紹介しますと思います。3人目は女性です。吉岡利代様です。

アメリカのタフツ大学卒業後、ゴールドマン・サックス証券にご勤務。その後、国連難民高等弁務官東京事務所を経て、世界中で人権問題調査を行う、本部がニューヨークの国際人権NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチの日本事務所の立ち上げに参加されました。国際人権NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチ・シニア・プログラムオフィサー、吉岡利代様です。よろしくお願いします。(拍手)

▽世界にひとつでも笑顔増やす

吉岡) 皆さんおはようございます。

国際人権NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチの吉岡利代と申します。地球社会共生学部のご開設本当におめでとうございます。皆さん1年生ということで、本当におめでとうございます。

今回、地球社会共生ということを改めて自分でも考えてみて、それを仕事にするということはどういうことかなと考えてみたんですけども、私にとっては、地球の中のパズルの一つを輝かせるということかなと考えています。地球全体がもしジグソーパズルだとしたら、それはどんどん日々変わり続けているものだと思うんですが、変わっていく世界のニーズの中で、自分が生まれた時代や場所、国という、その環境でどうやって一人一人が自分の原点を大切に成長していけるのかということが、地球社会と共生する、それを仕事にするということなのかなと、個人的には考えております。一つの仕事をずっと続けるということとは限らないと思いますし、変わる世界のニーズの中で、長い人生の中でどうやって、置かれた場所で世界のために、地球のために何ができるのかと考えることが、地球共生という仕事なのかなと改めて思いました。

私にとって地球社会共生を最初に仕事にしたいなと思ったのは、思い返せば小学生の時でした。小学生のときに何が起きていたかといいますと、アフリカのルワンダという国で内戦が起きていまして、たくさんの方が難民になって流れ出ていたんですね。その様子を普通に日本のお茶の間でテレビを見て、同じ人間として生まれたのに、なぜ日本はとても安全で平和にテレビを見ていられるのに、地球の裏側、アフリカではこんなに苦しいことが起きているんだろうというふうに、疑問に思ったのが、今でも印象に残っています。そして、一生かけて何を、一応人間として生まれたからには、死ぬまでには世界に一つでも笑顔を増やしてから死ねたらいいなという夢を持ったのが、そのときです。そこから今の仕事につながる歩みが始まったのかなと思っています。国連難民高等弁務官事務所の緒方貞子さんという、とても素敵な日本人の女性の方が頑張っていらっしゃる姿を見ながら、いつかは緒方さんみたいになれたらいいなと思って、これまで歩んできました。

私は、小・中と日本にいたんですけども、高校から家族の転勤がきっかけだったり、その後自分で留学したりして、アメリカに高校3年間、大学4年間、国際関係論を学んでいまして、その後日本に帰国して、世界に一つで

も笑顔を増やすという目標のために、そのときに自分が一番成長できる、伸びる環境はどこかなということも、常にアンテナを立てて探してきたんですけれども、一番最初に見つかったのが、ゴールドマン・サックス証券という金融の仕事で、投資調査部で金融アナリストの見習いのようなことをやっていました。それを2年間ぐらいうちの後に、社会人としての筋トレ期間だったと思っていますが、筋トレができたなと思ひまして、もともと目指していた緒方さんになりたいという夢を持っていたので、日本の国連難民高等弁務官事務所に1年間ほどお邪魔させていただきまして、日本に来る難民の方々の支援などをしていました。今はシリア難民の話などもニュースで見えるかと思いますが、日本はアジアから、特にミャンマーの難民申請者の方が多いんですが、その方たちの支援をしていました。

その後、6年ほど前になるんですけども、今勤めているヒューマン・ライツ・ウォッチという人権 NGO、団体自体は40年ほど前からある団体なんですが、アジアで初めてのオフィスを東京に開くということになったときに参画しまして、今に至るという感じです。

皆さんもこれから地球共生のために、まだ発展途上というか、その時々で熱中されているところに行けたらいいなと思っているので、その意味では皆様と同じところに立っています。

ヒューマン・ライツ・ウォッチの本部があるのはニューヨークで、エンパイアステートビルの中にあるんですが、国際人権 NGO という組織というか、カテゴリー、この地球社会共生の中での役割というのは何かということを考えてみたんですが、国際的な人権を扱っている NGO 組織ということなので、世界にたくさんあるいろんな問題の中の人権の専門家という位置づけだと思います。そして、国境ですとか、いろんな国が存在すると思うんですが、それらを越えて人権を守るため、どのような人権侵害が世界中で起きているのかということ、実際に現地に行って調べて、起きている状況を世界に発表する。そしてその問題解決のために、自分たちもちろん動きますし、いろいろな世界中のアクターの方、政治団体や国連だったり、企業の方と協力しな

がら、人権を守るために動いていくという位置づけ、役割を持っています。

ヒューマン・ライツ・ウォッチの対応ですが、世界に400人ぐらいスタッフがいまして、NPOとかNGOというとボランティア組織かなと思われたりするんですが、400人の内、多分半分ぐらいが弁護士です。なぜかという、私たちの活動基準というのは、先ほど赤阪先生からお話がありましたとおり、世界人権宣言というものが、ここに幾つか出させていただきましたが、第二次大戦の悲劇を二度と繰り返さないようにということで、大戦後につくられたんですが、この人権宣言と国際人権法、国際人道法という法律が存在するんですが、それに違反しているかどうかということで活動基準を決めているので、やはり法律が分かっていないと仕事ができないという面もありまして、法律家の方が多かったり、あとはジャーナリストの人たち、学者、地域の専門家の人たちが活動しています。世界90カ国でいろいろな人権問題の調査をしているんですが、例えば子ども、女性、そういうマイノリティーと言われている人たちとか、テロ対策の中での人権侵害、性的マイノリティーのLGBTの権利とかをやっています。

▽メディアも報じない悲惨追って

どのような人権侵害のカテゴリーを扱っているかですが、3つありまして、1つ目は紛争下での民間人の保護。今でいうとシリアの内戦ですとか、政府と反政府が戦っている中で一番最初に被害に遭ってしまう人たちというのが、力のない弱者、子どもだったり女性だったりするんですね。そういう人たちが自分たちでは声を発することができないことも多いので、代わりの声になって世界に伝えていくことをやっています。

2つ目のカテゴリーが独裁政権下の民間人の保護。これは分かりやすい例が北朝鮮かと思いますが、北朝鮮のように一方的に人権が守られていない国、報道の自由もなければ、行動の自由もない。その国で民間人がどのような状況におかれているかを調べて、世界に伝えていくことをやっています。

3つ目はマイノリティーの権利なんですが、マイノリティーというのは先ほども言いましたとおり子どもだったり、女性だったり、障害者だったり、どの国でも、日本にも存在しますし、途上国にも存在する。こういった人権を守るということをやっております。

実際にどうやって世界中で起きている人権問題を調べているのかという、このやり方がNGO ぽいなといいますか、補っているところかなと思うんですが、NGO だからこそその身軽さ、非政府組織であるからこそそのフットワークの軽さというのを生かして、何か問題が起きたらすぐ現地に飛んでいくんですね。例えばトルコとシリアの国境があったら、シリアに入るために国境を歩いて乗り越えて入っていったりして、前日に爆撃があった町を訪ねて、実際にどのような爆撃が行われたのかということ被害者に話を聞いたり、加害者に話を聞いたり、実際にお家にあいている爆弾の穴などを見て、こういう穴があいているのであれば、例えばロシア製の爆弾が使われたんだろうなというふう証拠を調べたりとか、なかなかどのような権利の侵害が起きているのかというのは、そのときの政府がやはり発表したくないことなので、情報として載せてこないことが多いですね。なので、そのようなときには、一つ一つ足で稼いでといいますか、例えばシリアで何人の方が亡くなったのかというときには、なかなかメディアでは報道されないこともたくさんあるので、病院を一つ一つ回って、死体の数を数えたり、本当であれば正式な報道として20人として出ているものが実際は200体あったとか、そのようなNGO だからこそできることという、情報集めということもやっております。

それは情報を集めるだけではなくて、さまざまなメディアに取り上げていただいたり、世界的なメディアで報道してもらうようにして、世界中に知っていただくようにしてから、その情報の力を使って、実際にその問題がなくなるために動いていく。例えば、それぞれの問題によって、どの世界のアクターの方に動いていただければ問題解決につながるかということは違うと思うんですけども、例えば北朝鮮の問題であれば、日本が国連の中でも発言力を持っていたりですとか、国連の決議案を書く力を持っていたりするので、

日本政府にアプローチをしたり、近隣国にアプローチしたりですとか、日本だけでなくアメリカ政府にアプローチして、EU（欧州連合）にアプローチして、グローバルでいろんな人々に動いてもらうことによって、声が発することができない人たちの権利を守っていくという、人権のために裏方で、いろんな人をつなげたりする役割を担っています。

これが調査の様子 of 1 枚なんですけど、こんな感じでその場に入り込んでいて、いろんな人から話を聞いています。私たちは調査報告書というものを年間に 200 冊近く出すんですけども、その 1 冊をまとめるのに 100 人ぐらいの方からお話を伺って、真実を見出しています。

東京にオフィスができたのは 6 年ぐらい前になりますが、なぜできたかといいますと、国際的に見ると日本というのはすごくポテンシャルがある国なんです。経済力を持っています。たくさんの ODA、開発援助も世界に渡しているので、その力を人権保護のために使ってもらいたいということで、6 年前にオフィスをつくりました。活動の柱としては、日本政府に対しても政策提言で上げるんですけども、私たちの同僚が世界中で集めてきた人権の状況を伝えて、日本としてもう少し頑張ってよというふうにアプローチすること。また、日本のメディアの方には、世界の人権問題を知っていただくという情報発信。そして、NPO、NGO であるので、ノンプロフィット、全て活動資金は個人のご寄附で支えていただいています。特に、人権というのは政府が問題を犯しているときもあるので、政府からのお金は一切受け取らないという団体のポリシーがありまして、全て個人や個人的な団体の寄附で活動を支えていただいています。

そして 4 本目の柱は、この 1、2 年のことなんですけれども、日本国内の人権問題の調査というのもし始めています。

具体的にはどのような問題があるのかというのをご紹介すると、イメージが浮かびやすいのかと思いますので、3 つ、挙げさせていただければ、特に日本と関連が深くて、共生という意味でほかのセクターとコラボレーションしているようなテーマを上げさせていただければと思います。

まず1つ目が、国連のところに丸してあるんですが、国連と共生という意味で、北朝鮮の人権問題です。この絵と写真、とても怖い写真なんですけれども、日本で北朝鮮というと拉致問題がすぐに思い浮かぶかもしれませんが、拉致問題は北朝鮮の中に存在する人権侵害の仕組みの一部であるんですね。それ以外にもたくさん問題があるんですが、その一つに、ここにも描かれている強制収容所と呼ばれるところがまだ北朝鮮国内に存在しています。20万人ほどの方が収容されていると言われているんですけども、アウシュビッツなどを想像していただいて間違いないと思いますが、公開処刑、家族の前で処刑されたり、自分の世代だけではなくて、もし反政府的な活動をしたというふうに見なされると、お父さんの世代、おじいちゃん・おばあちゃんの世代、3世代に渡って強制収容所に送られてしまうという現状がまだあります。

北朝鮮は閉じられてしまっている国で、国連の方たちでもなかなかアクセスがなかったりするので、まずこの問題を解決するためには、独立した調査委員会というのを国連の中でつくってもらい必要があるだろうと私たち考えまして、世界中のNGO、45団体ぐらいのNGOと手を取り合って、NGO連合というものを4年ほど前に立ち上げたんです。その連合として国連の中での独立した調査委員会というものの、これが調査委員会の記事が日本で取り上げていただいたときのものなんですけど、ここまでつくらなくちゃいけないよという目標を掲げて、例えば日本政府だったり、EUの政府だったりに働きかけを続けたところ、実際にこの調査委員会ができて、分厚い報告書ができ、北朝鮮の国内でこんなことが起きているんだという状況が明らかになったのもつい1年ほど前のことです。

今はその後も続いておりまして、国連の中で北朝鮮というと、これまではどちらかというと核問題やミサイル問題というものが取り上げられることが多かったんですが、そこに人権という問題も加えてもらおうということで、北朝鮮の人権問題が取り上げてもらえるように、今ニューヨークの仲間が国連に対しても働きかけを続けています。

▽ LGBT 差別なくそう

次は、どちらかというと企業との共生という面もあるかなというテーマなんですが、LGBTの権利です。LGBTも最近ニュースにもなっているので説明する必要もないかなと思いますが、性的少数者と言われている方々で、最新の調査でも7.6%いるという結果が出ています。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーでLGBTなんですけれども、日本国内と世界の状況とがあると思うんですが、世界ではアフリカの国が多いんですが、例えば同性を好きになってしまったというだけで死刑になってしまうという国はたくさんあるんですね。この地図の中で黒くなっているところがLGBTであること、それを公にあらわすことによって死刑になってしまうという国です。

ただ、前進も続いていまして、この赤い国は同性同士の結婚も法律的に認められているという国です。かなりのペースで増えているんですが、日本ではまだ残念ながら同性婚という形では認められていないんですが、今月渋谷区と世田谷区で同性パートナーシップ証明書というものの発行が始まりまして、ある程度の条件を満たしている同性とパートナーとして暮していれば、例えばパートナーが病気になってしまったときに、病院に面会に行くことができたりとか、あとは公的なアパートに、住居にパートナーとして入ることができたりとか、そのための証明書が日本でも発行されるようになったので、もう少しで日本も同性婚が合法化されるんじゃないかなと思っているんです。

ただ、まだまだそういう前進する動きが日本国内で出ていると言えども、差別がいろんな場所で存在していますし、理解というのが深まっていないところもあると思うんですね。ヒューマン・ライツ・ウォッチ、NGOとしてやっていることが、大きく日本には2つありまして、1つ目は、LGBTの中学生・高校生に対するいじめの調査を数カ月前に始めたところです。たくさんの当

事者の中高生の LGBT の学生たちの話を聞いて、ちょっと違う、男の子なのに女の子っぽいとか、女の子なのに男っぽいというだけでいじめられてしまうという学校の環境がまだ残っているということなんですけれども、実際にどういういじめがあるのかですとか、現状を今調べている段階ですが、それが来年春ぐらいに本格的な報告書としてまとまるんですが、報告書がまとまり次第、先ほどお話しした、最後のステップの政策提言のところなんですが、文部科学省などに、実際にこんなことが現場で起きているんだよ、生徒たちはこうやって困っているんだよ、先生も本当の LGBT のことを教えたいけれども、まだそういう知識が足りていないんだよという現場の声を、学生の皆さんに代わって政策をつくっている人たちに伝えていくことによって、今後より LGBT のそれぞれの権利の守られた方針が日本でもできるように活動していきたいと思っています。

やはり差別というのは、学校の環境だけではなくても、職場の環境でもまだあるんですね。LGBT の方たちは離職率が 5 倍ぐらい高かったり、やはり自分らしくそのままで働けないということは、自分の力が思う存分発揮できない職場であるということであるということだと思うので、職場でも多様性を認めて、誰でも自分らしく働くことができるように、ワーク・ウィズ・プライド (Work with Pride) というイベントを毎年 1 回やっています、これは企業の人事の方にどのような研修制度があったりとか、福利厚生を異性のパートナーだけではなく同性のパートナーにも適用したらいいんじゃないかとか、そのようなセミナーを、今年はいよいよ 2 週間ほど前にリクルートさんで開催させていただきました。去年はパナソニック、その前はソニーなどで、企業とのコラボレーションで人権も取り上げて頂いています。

最後ですが、子どもの権利。この写真、児童養護施設と呼ばれている社会的養護という制度の中ですが、一言でいうと、自分の実の親、血のつながった親と暮らせない子どもたちの権利がどのような状態に置かれているのかという調査を、震災の後にずっと続けてきたんですが、今もその子たちのために厚生労働省などに働きかけているところです。日本には 4 万人ほど親と暮

らせない子どもがいるんですけれども、その子たちのほぼ9割近くが今の写真のように養護施設で暮らしているんですね。これは、世界いろんな国で里親制度や養子縁組と呼ばれていますが、児童養護施設ではなくて、子どもというのは、子どもの権利条約に国際的にもしっかり書いてあるんですけれども、やはり温かい家庭的な環境で育つ権利があるというふうに条例に書いてありまして、今の日本だとなかなかそれが守られていない。ほとんどの子どもが施設に行ってしまうという状況なので、里親ですとか、養子縁組で新しい家族をつくるという仕組みがとても世界と比べても弱いんですね。いろいろな理由で自分の親と暮らせなくても、新しい家族がつかれるように、そして子どもらしく、一人一人その子らしく生きていける環境がつかれるように、このように国会議員の方たちに、今働きかけをしているところです。

最後に、人権の仕事などをしていますと、やはり学ぶ自由がある、こういった学校にいられることですか、自分の好きなキャリアを選べる自由があるということは、日本にいと空気のように感じてしまうんですけれども、これはありがたいことだなというふうに思います。ぜひ、この4年間を、この環境を思う存分生かして、自分の原点は何なのかとか、自分の勉強したいことというのを一生懸命学んでいただければなと思うのと、今回のフランスのテロの話でも思ったんですが、地球と共生というか、一人一人が地球市民であることはもちろんなんですが、これまで存在した枠組みが外れて一人一人の距離がとても近くなってきている。そしてどこで何が起こるか分からなくなっていると思うんです。そういうときこそ、まず知ることから、興味を持つことから全て始まると思うので、ちょっとでも自分がこのことに興味があるなと思ったら、情報を集めていただいたり、そして想像力を生かして、いろいろな人生があって、全ては生きることができないので、地球の反対側、例えばテロの場合どうしてこの人はテロリストになってしまったんだろうとか、どういう気持ちになるんだろうと、想像力を働かせて、そして情報を集めて、自分だったらこの場所で何かできるんだろうというふうに考える4年間にしていいただければ、とてもうれしいなというふうに思っています。

少し長くなりましたが、今日はこの辺にさせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

司会) ありがとうございます。

3人のパネリストの方、赤阪清隆様、高瀬昇太様、吉岡利代様にご発表いただきましたが、ここからは参加されている学生の皆さんと一緒にディスカッションをしたいと思います。積極的に質問をしていただきたいな、ディスカッションに参加してもらいたいなと思います。

ここからは会田先生にお願いいたします。

会田) 3人の先生方、どうもありがとうございました。

私自身大変勉強になりました。こんなに学べるとは思いませんでした。皆さんもっとそうだろうなと思います。後で時間を設けますので、分からないこと、何でも3人の方に聞いてみてください。

今話を聞いて、簡単に私の印象ですが、とっても大切なことを皆さんおっしゃってくれた。すごくはっきりと言葉になされた方もいますけれども、皆さん使命感を持ってお仕事をされている。あるいは、早い時期から使命感を持って世の中に出て行く、何かしたい、働かかけたい、そう思っている。多分皆さんもどこかでそう思っている。それをこれを機会に伸ばしてもらえたらいいなと。私自身はずっとジャーナリストをやってきたんですが、皆さんほど立派じゃないけれども、やはり何かあるんですね。伝えたい、自分が現場に行行って伝えてみたい。そういうちょっとわがままなところもありますけれども、そういう仕事をずっとしてきました。本当にすばらしい話でした。

これから3人の方に、最初に私から聞いてみたいと思うことが幾つかあります。本当にここ2、3日、私のような仕事をしていると、フランスで起きたテロ事件がものすごく心配だし、これからどうなるんだろうなという気がしているんですが、この問題で我々は何をしたらいいのか、今思っていることをそれぞれの立場から聞いてみたいと思います。

吉岡さんどうですか。今私たちはどうしたらいいんでしょうか。

▽テロなぜ起きるか、考えよう

吉岡) やはりなぜこんなことが起きてしまったのかというのを、一人一人が考えるということが一番最初なのかなと思います。

先ほど赤阪先生のお話でもあったんですが、どうしてこの究極的な手段を使わなくてはいけなかったのか。それはそれなりに理由があるはずで、もともと暮らしていたフランス社会なり、ほかの社会の中で周縁化されてしまっていた自分の思いが通らなかったり、やはり報われないところがあった。そういうことが、自分がつらかったからこういう手段にしくちゃいけなかったということがあると思うので、ふだん日本でも自分の生活の中でも何かを周縁化していないかという部分は、自分のことを振り返ってみたりとか、日本社会の中でどういうコミュニティが、そのような状況に今置かれているんだろうとか、これからどういう人たちが難しい立場に置かれるんだろうかということも考えていくことが、今後テロを防ぐ、日本の中でこのような悲劇を防ぐ一歩になるのかなというふうには思っています。

会田) 高瀬さんの世界は、そういうところと離れているように見えるかもしれないけれども、今お話を聞いたらやっぱり社会のためにどうやってみんな一緒に暮らせるようにしたいか、それを考えてお仕事をなさっています。

高瀬さんの立場からだと、そういう企業人として、こういう事態を迎えてどんなことが可能なのか。あるいは皆さんにどういうことをしてほしいと思っているか、その辺をお願いします。

高瀬) 私もニュースで聞いてびっくりしましたがけれども、テロであったり、国際平和であったり、私はその専門家でもないですし、恐らくニュースを見てびっくりしてという立場でいうと、多分みんなと同じなんだと思います。

本当に、吉岡さんがおっしゃったように、思うこととしてはああいうことになってしまいましたと、テロリストを弁護する気はないんですが、彼らにとってはそれが正義だったはずだということですよ。全然世界からしたら非正義なんですけれども、何でそういう正義が生まれてきたか。そういう、

要は恐怖を与えなくちゃいけないとか、注目を浴びなくちゃいけないとか、主張があったはずで、それがああいふ事件が起きると恐怖にかられたりとか、憎悪にかられるんですけれども、それこそが目的だと思うので、なぜそういうことが起きたのかということ、やっぱり知るというのは重要だなと。企業人としてというよりは、一ニュースを見ている個人としてという感想になってしまっていると思います。

会田) 今、2つ大切なことを言っていたいただいたと思います。

1つは、周縁化しない、人々をのけものにしたりしないということですね、それから理解すること。すごく理不尽かもしれないけれども、想像力を働かせること。とても大切なことを2つ指摘していただいたなと思います。

赤阪さんは長いこと外交の現場におられましたけれども。

赤阪) 私の働いておりますフォーリン・プレスセンターのツイッターで、昨日メッセージを出したんですが、テロをまず憎むということですね。絶対に許してはいけないという、そんな気持ちを、まず我々は持つのが第一点だと思います。

第二は、イスラミック・ステイト (IS、イスラム国) という連中をぶっ潰さなくちゃいけない。これは崩壊させなくちゃいけない。ただ、崩壊させなくちゃいけないんですが、彼ら全部を潰すことは無理でしょう。今フランスやアメリカは空爆を強化していますけれども、全部潰すのは無理だと思います。

これは変な例えかもしれませんが、WHO がマラリア撲滅運動というのをやったことがあるんです。マラリアを世界中からなくしてしまおうと。これは失敗しました。マラリアを媒介する蚊、これを全部ぶっ殺してしまうのは無理なんですよ。ですからどうやったらいいかというと、マラリアはマラリアを持った蚊同士で、人々が住んでいるところから離れたところに押しやる、閉じ込める。で、自分たちが住んでいるところには蚊が入ってこないようにする。そうすることによって自分たちは被害をこうむらないようにできる。

そのためには、3 番目として周辺諸国の対応能力の強化ですね。シリアの政治的な安定、それからイラクの政治的安定、トルコとかいった周辺諸国の政治的安定が必要です。そのために日本は支援をする。空爆を支援するというのは日本はできません。むしろ経済援助とかいろんな形で周辺諸国の政治的安定を助ける。日本のテロ対策も含みますけれども、彼らが我々を攻撃し得ないように我々を防御するというような政策が必要ではないかと思います。

会田) 具体的な対応の方向、国際社会はどうすべきかということについて、重要なお話をしていただいたと思います。このテロの話、この後、皆さんからの質問があるかもしれませんが、ちょっと話を別な方向にもって行って、3 人の方のご意見を聞いてみたいと思います。

すごく単純なんですけど、これまで赤阪さんは相当な、それから吉岡さんや高瀬さんの場合は、それでもかなりの年数にわたって、人々のためにいろんなことをやろうとしてきているわけですが、世界のために今まで一番苦労したことと、それから一番うれしかったこと。どんなことがありましたか。そんな話を生で聞いてみたいと思います。高瀬さんどうですか。

▽ワクチン、口移した赤ちゃんの笑顔

高瀬) ちょっと思い出しながら、苦労したこと、大企業で働くということ自体、非常にチャレンジもあり、当然楽しいこともあるんですけども、一方で、悪い言い方で社内政治とか、やはり自分の人生で何をしたいんだということ突き詰めて考えたときに、それが本当に会社の中にいることなんだろうかという、そういう問いにいろいろ気づき始めた時期があって、そういう問いを抱えながら、かといって会社をやめるということは決断なので、そういう問いをしながら大企業で働いていたという時期が一時あったんですが、その辺は心理的に苦しい時期だったかなというのが一つです。

仕事をやめて起業したり、あるいは先ほど説明したような自分がやろうと

思ったプロボノをしたり、チェンジメーカーというような、そういう取り組みをやっていく中で、いろんな人がかかわってくれたり、助けてくれて、少しずつ形になって、そういう現場に来て、共感してくれる人や喜んでくれる人がいて、そういう顔を見ているときというのは本当に楽しいし、仕事をやめてそういうことにかかわれたということは、本当にやめてよかったなど。

企業で働くのもいいことだと思いますし、私の友人でも当然企業で働いてチャレンジしている方もたくさんいて、その中で目標を持ってしっかり働いている方は、それはそれで素晴らしいと思うし、人それぞれあると思うんですが、私個人的にはそういうことがあったということです。

赤阪) 私が苦勞したのは、世界保健機関 (WHO) で働いていたときのことです。日本人の事務局長の補佐だったわけですが、彼に対する西側諸国の批判がすごくて、しかも彼が少し口を滑らしたことで、アフリカ勢が怒って、事務局長辞任要求決議というのが総会に出ました。私は彼を補佐していましたので、一緒に首になるんじゃないかと、本当に恐れたことがあります、

国連にいたときは、潘基文事務総長の下で広報担当をやったわけですが、彼にも西欧社会の批判が強くなって、どうやったら誤解を解いてもらえるか、アジア人の物の考え方というのは、なかなか西欧社会では理解してもらえないところがあって、そこで苦勞しました。

一番うれしかったのは、これも WHO にいたときなんです、ミャンマーに行って、ポリオのワクチンを赤ん坊に口から注いだときなんです。2回ワクチンを与える必要があるんですが、ほかの子どもはギャーギャー泣いているのに、私がポリオワクチンを口から注いだ女の子、6カ月か1歳くらいのかわいい赤ちゃんなんです、にこっと私の顔を見て笑ってくれましたね。涙が出るほどうれしかったですね。この子は一生小児麻痺になる可能性はないんだと思うと、国連というのはこういういいことをしているんだということ、私自身本当にうれしかった。

会田) ちなみに赤阪さんは今、世の中では、日本が生んだ最高の国際公務員と言われています。実際に今の話を聞いてそうだなと思いました。

吉岡さんどうですか。

吉岡) 大変だったこと、日々仕事の中で大変なことは、やはり無関心というのか、なかなか世界のいろんな問題に関心を持ってもらうことが大変だなというのは、日々つらさを感じているんですが、それとは別に個人的に一番大変だったのは、今の仕事に転職してくるとき、特に企業から国際協力の世界に来るときが一番大変でした。特に、家族内、私は一人っ子なので、両親の理解を得るのがとても難しく、結局社会人になって家を出て、ほぼ親との縁を切ったみたいな感じになって国連に行くことができたので、そのときが一番つらかったですね。

それとつなげてうれしかったことは、ようやく3年ぐらい前になって、両親がヒューマン・ライツ・ウォッチのイベントに参加してくれたというので、少しずつは認めてくれているのかなというのがうれしかったのと、あとはやはり、仕事の中では赤阪さんもおっしゃったとおり、喜ぶ顔とか実際にこの問題を伝えてくれてありがとうとか、解決につながったよと言ってもらったときとか、あとは世界中のすごく勇敢な人権活動家の方たち、一人で活動している方が多いんですけれども、彼らに会ったときには何とも言えない、生きていてよかったなという感じでいます。

会田) ありがとうございます。

今のお話を聞いていると、吉岡さんにしても高瀬さんにしても、それぞれ世界的な企業で仕事をしていたんだけど、それを離れて自分の目指すところへ進んだ。赤阪さんの場合も本当に世界中で、本当に現場に出て仕事をなさって、やはり現場に行きたい、現場で見たいという仕事。僕らもそうなんです。ジャーナリストという仕事のときは、何かすごく共通するものを感じて、大変うれしかったです。

皆さんから質問を受けながら、パネリストの方々でもやり取りをしてもらってもいいかなと思っています。質問のある方は手を挙げて何でも、どうですか。

▽「共生」、素晴らしい名前を持った学部

質問) 今日のお話と余り関係ないですが、ずっと一生懸命元気に働いていくのは、やっぱり軸として健康というのが重要だと思うんですけども、健康で氣をつけていることとかありますか。

吉岡) とても重要です。体が元気でないと氣も元気でないので、意識的に氣をつけるようにしているんですが、好きなことをやる時間を強制的につくるといとか、私の場合は自然に触れていることとか、風にあたっていることが好きなので、暇があれば散歩に行ったりとか、ランニングに行ったりするようにしています。

赤阪) 健康は大事ですね。ストレスをためないということを大事にしています。

国際機関で働いている時に、私自身はストレスを全然感じていなかったんですが、いつかたまっていたのかもしれませんが。WHO を退職して日本に帰るという段になって、電車の中で胸が苦しくなってそれから恐ろしい痛みが来て、心筋梗塞をやったんです。やっぱりストレスをためないことというのは重要かもしれません。皆さんのように若いときには楽しいと思うような仕事を、それを一生懸命やられるが一番健康にいいんじゃないでしょうか。

高瀬) 体の健康ということは今まで余り気にしていなかったんですが、単純に暴飲暴食しないようにするとか、酒を飲みすぎないようにするとか。若いときは余り気にしていなかったんですけどもね。

最近、クロスキットといって、これは半端なくしんどいんですけども、体がぱんぱんになるんです。ふだん動かさない筋肉を動かします。運動すると楽になるという部分です。あとは、赤阪さんがおっしゃったとおり心理的にはストレスをためないということです。

個人的には、何でもやっていくみたいなこととか、それが大企業にいと面倒くさい書類をいっぱいつくって判子押しに回るとか、そういうことはもうやりたくないと思ったらやらないといとか、やりたいことを思い切りや

ろうというのが本当にストレスがたまらないし、そういうことをしていけばいいかなと思います。

会田) 時間となりましたので、あと1問か2問。この人にこういうことを聞きたいと指定して質問してください。

質問) フランスのテロのことで聞きたいんですけども、EUの中で難民を受け入れている国々が、フランスでのテロで難民の中にもテロリストがいたということで、難民の受け入れを拒否し始めて、EUが難民を助けなくなってしまうたら、難民の方はどうなってしまうのでしょうか。

また、こういった機関が援助する必要があるのでしょうか。

会田) どなたに聞きたいですか。

ヤナカ) 全体的に皆さんに聞いてみたいんですけども。

会田) では赤阪さんに。

赤阪) EUは難民政策に変更は加えないと発表しましたから、難民政策自体は多分大きな変化はないんじゃないかと思います。難民については、きちっとした審査が行われますので、その審査を厳格にやろうということにはなると思います。

会田) 吉岡さんありますか。

吉岡) 難民認定のための審査の基準というのが国連で決められているんですけども、それをしっかりやるということはもちろんあると思います。ただ、国連の難民機関だけに頼っているだけではだめだと思うので、そういう部分で一人一人を受け入れる国、ドイツだったらドイツの国民の意識ですとか、日本にも難民の方、今年に入ってから難民申請者が5,000人を超えているので、遠いことではないんですね。そういう方たちが来たときに、一人一人の心がけとして何ができるのか、どういうことが出身国で起きているのかとか、日本としての国際的な責任は何なんだろうかというのを、日ごろから考えておくことが重要かと思います。

会田) もう一問。手が挙がりましたので、どうぞ。

質問) この学部はなかなか面白い名前をしていると思いますが、一番最初にこ

の学部についての第一印象と、今まで皆さんがやってきたこと、やられてきたこととどう関連づけられるかということを知りたいです。

会田) 短く一人ずつ。最初の印象のところを聞きましょう。

吉岡) 22 世紀ばいなと思いました。

赤阪) 共生というのは日本が世界に伝えられる重要な概念だと思っています。

進歩主義に基づいて西欧文明が一本線で歴史を進めようとするのに対して、いろんな文化や文明をもった人たちがともにお互いを尊重しながら共生するという考え方は非常にすばらしいと思います。これは日本では昔、梅棹忠夫が『文明の生態史観』で指摘した歴史観でもあります。西欧と違って、日本は別々の道を歩むんだけれども同じ方向を向いているんですね。そういう意味では地球の共生というのも同じような概念だと思ひまして、すばらしい名前をつけた学部だと思っています。

会田) 高瀬さん、一言お願いします。

高瀬) ぱっと見ぼんやりしているなど。でもやはり時代の流れというか、おっしゃったように 22 世紀ばいなというか、サステナビリティとか、今まで資本主義が流れにあったときに、今後サステナビリティというのが出てくる。この未来に向かって非常にいい学部ができたという印象を受けました。

会田) どうもありがとうございます。

これで終わりにして、後ほど平澤先生からご挨拶をいただきますが、今日聞いた話の中で一つ重要なと思ったのは、戦後我々の生きている社会の原点にあった人権宣言、私もおかわる仕事をしていました。みんなちょっと一回読んでみたらどうかと思います。では終わりにします。

司会) ありがとうございます。

では、いま一度、赤阪清隆様、高瀬昇太様、吉岡利代様に、大きな拍手をお送りください。お忙しいところ本日はありがとうございます。(拍手)

地球社会共生学部開設記念シンポジウム、最後に地球社会共生学部の学部長平澤典男先生にご挨拶をいただきます。

平澤) 学部開設の名を冠したシンポジウムが、成功裏に無事終了してほっとし

ております。

今日お集まりいただきました赤阪先生、高瀬先生、吉岡先生には、遠いところわざわざお越しいただき、貴重なご講演をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

本日のお話を、皆さんが真剣なまなざしで聞いている様子を見まして、私としてはフレッシュマン研修のキャンプで感じたことを、いま一度思い出していただければというふうに思いました。君たちの心の底にあるはずの若者らしい正義感、情熱をどう維持していけば、この3人の先生のような活躍ができるかということが想像できたのではないかと思います。

4月に入学し、8カ月が過ぎました。諸君の中には部活やサークルが忙しいとか、あれもやりたいこれもやりたいということがある人、あるいは何をしたいか分からなくなったという人も中にはいるかもしれません。しかし、今日のお話を聞いて、3人の先生方の後ろに、どういう世界が開けているのかということを垣間見ることができ、もう一度、この学部が育てるべき人材の方向性、そして自分の可能性を確信できたのではないのでしょうか。

やがて諸君が学部を卒業し、社会に出て活躍をすることで、本日お集まりいただきました3人の先生方には、自分たちの話が地球の学生の成長に役立ったと思ってもらうこと、それを私は期待して、閉会の挨拶にかえたいと思います。

(拍手)

(了)